編集後記

気分という言葉ほど、一見その意味が曖昧そうにみえるが、しかし自己の存在を正確に認識するときに重要なものはない。「セザンヌの絵は美しい」、「虎屋の羊羹は美味しい」、さらに「100周年記念の計画は壮大だ」などというときの「美しい」、「美味しい」ならびに「壮大」などの感情は、一般に、自分以外の具体的な対象物に向けられた自己の気持の表明である。それに対して「今日は気分が暗い」、「不機嫌な人」、あるいは「表裏のある人」などにおける「暗い」、「不機嫌」、「表裏のある」などの感情は、決して具体的な対象に向けられたものではない。たとえば、「暗い」といった場合、対象となる人のどの点が暗いのであるのかを示すものではなく、この人の具体的な感情の根底にあって、その存在全体を規定する言葉として使われている。オットー・ボルノウ『気分の本質』に従えば、気分とはこのように具体的な感情の背後にあって、「人間生活全体の状況のようなものであり、またその色調である」ということになる。ここで注意すべきは、それらが決して「それ自体の外にあるものを指し示す」ようなことはしない、という点である。

自己の存在を正確に認識しようとするとき、外的な具体的な対象物にいかなる感情を持つかといった点を包括的に把握することも必要であろう。しかし、これは自己の外の対象物の有り様に依存している。外的条件に依存しない自己の本質を把握するには、自己と正面から内省的に対峙し、具体的な感情の背後に存在する気分を析出するしかない。この気分を如何に把握すべきか等に関わった人々の葛藤が多様な人間の生き方を生み出したばかりか、19～20世紀にかけて「実存主義」哲学を生み出したことはあまりにも有名である。

ところで、上智大学は2013年に創立100周年を迎える。1世紀を契機に新たな国際化された大学を作るべく様々な計画が進行している。これらの計画が具体的な実行性を持ち、計画の担い手に実現に向けてのエネルギーを引き出すものとするためには、まず何よりも上智大学が自分自身を明確化して、それを計画の中で体系化する必要があろう。つまり、上智大学が自らの「気分」を把握することが喫緊の課題であるだろう。上智大学の「気分」として「上智らしい教育、研究」という言葉が繰り返し口上に登場する。さらに、この慣用句の意味内容として「キリスト教精神にもとづく研究、教育」、またキリスト教に代えて「イエズス会」を代入したものなどもよく耳にする。しかし、これらの何れもが「上智らしさ」を具体化するには不十分であることは明らかであろう。キリスト教精神にもつづく研究教育をする機関は全世界には数多あり、イエズス会が設立母体となる大学も世界に80校ばかり存在している。したがって、「キリスト教精神」や「イエズス会」などを踏まえてその上で「上智らしさ」を具体的な言葉で表現しない限り、大学が自己を明確化したことにはならない。

上智大学がその「気分」を把握するための出発点は、個別性を乗り越え（＝国際性）、人類愛（＝キリスト教の愛、同士愛アガペー）の実現を目指す研究教育の機関とする点にあるであろう。この言葉のさらなる具体化は、昨年12月22日にイエズス会第30代総長アドルフォ・ニコラス師が上智大学での講演で述べられた「上智大学の力と叡智をさらに広げる」ための4つのチャレンジを内部に取り込むような仕方で行われなければならないであろう。編集氏も齢65を過ぎてしまいました。いやーさてさて年寄りは死なず消え去るのみですな。経済学部には優秀な若手研究者がスタッフに加わりつつあります。彼らの手に未来を委ねるなんて行く末が楽しみです。